14. 1869 次調査報告

遺跡名	武蔵国府関連遺跡		
グリッド	M90－８次		
所在地	東京都府中市宮町３－11－５		
現地調査期間	令和２年11月10日～令和２年12月２日		
面積	9.5㎡	遺物出土量	コンテナ１箱(26袋)
検出遺構	その他の遺構13基(M90－ＳＸ49～61)［奈良・平安時代］		
調査担当者	佐藤梨花		
調査従事者	中條寛(府中市遺跡調査会)，村田博・梅宮誠・秋吉文彦((株)Daisan)		

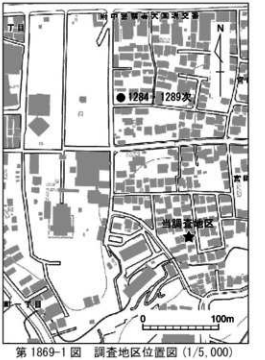
1　調査地区の概要

当調査地区は，武蔵国府関連遺跡の国府地域に位置し，京王線府中駅の南約 550 m，大國魂神社の東 170 mにある。地形的には，府中崖線から北約 80 mの地点に位置する。

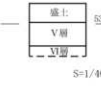
当調査区周辺では武蔵国衙域に関連する発見が多くある。当調査区から北西約 200 mで行った 1284 次及び 1289 次調査では，武蔵国衙の中心的建物と推定される遺構が発見されている。また，南に隣接する 1829 次調査（令和元年度調査・現在整理作業中）では，幢竿支柱跡とみられる遺構がいくつか確認されている。

本件は，当初の工事計画では地盤改良工事はなく，また基礎掘削も浅いため，工事による掘削は遺構面に達しないと考えられた。そのため，根切工事時の立会調査を指示したものである。

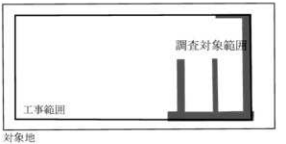
令和２年11月２日に根切工事が行われ，立会調査を行ったところ，掘削の一部が遺構面に達し，遺構等が確認された。事業者と協議の結果，工事範囲のうち，掘削が遺構確認面によりも深く達する深基礎部分のみを本調査対象に，

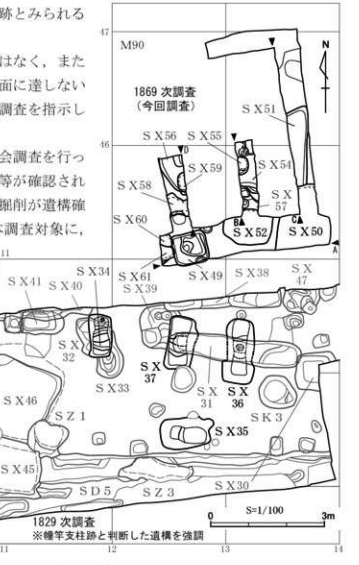


第 1869-1 図　調査地区位置図 (1/5,000)



第 1869-2 図　層序





第 1869-3 図　調査対象地の位置と遺構配置図

同月 10 日より調査を実施した。

当調査区では，現地表面から 0.2 mまで現代の盛土があり，盛土直下でⅤ層を確認した。検出面はこのⅤ層上面である。

2　遺構と遺物

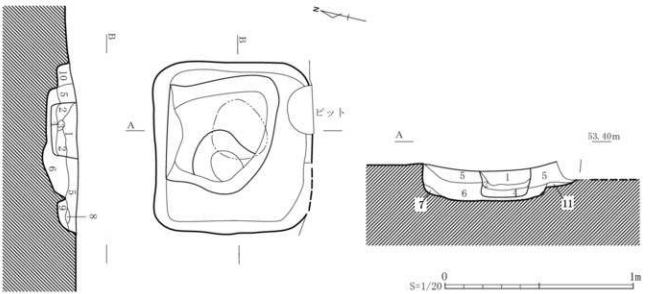
その他の遺構

その他の遺構として，計 13 基検出した。

M 90 －ＳＸ 49　ほぼ正方形の隅丸方形の掘方をもつ柱穴である。柱痕跡を確認した。柱痕跡の直径は0.3 mで，深さは検出面より 0.2 mを測る。柱痕跡の底部は硬化する。掘方規模は0.9 m×0.84 m，深さは検出面から 0.42 mを測る。暗褐色土主体の覆土の様相と出土遺物から古代の遺構と考えられる。

遺物は縄文土器片４点，土師器片５点，須恵器片３点が出土した。いずれも小片のため，図化するに至らなかった。

M 90 －ＳＸ 50　規模は南北 1.35 以上m，東西 1.6 m以上である。遺構は工事による掘削を受けない深さまで及んでおり，一部地下保存としている。遺構の上部は大きく撹乱を受けており調査での掘削は行っていないが，壁面Ａ（第 1869-5 図）の観察によれば，盛土直下から検出面まで 0.3 mの掘り込みが確認される。覆土は暗褐色土でロームブロックを多く含む。他の遺構と



M90－ＳＸ49　土層説明　1～4：柱痕跡　5～11：掘方埋土

1.暗褐色土　粘性，しまりともにやや弱い。粒子細かい。灰色の土を主体とし，φ2～3mmの灰白色粘土粒を微量，φ5　～　10mm　の灰白色粘土ブロックを少量混入する。φ3～5mmの黒褐色土をブロック状にごく微量含む。
2.暗褐色土　粘性，しまりともにやや弱い。粒子細かい。色調黒い。灰白色粘土をφ1　～　3m m　の粒子状にごく微量含む。
3.暗褐色土　粘性，しまりともにやや弱い。粒子細かい。2層土中に混入したブロック状の灰色土。
4.暗褐色土　粘性やや弱く，しまり非常に強い。粒子細かい。柱痕の底部で非常に硬質化している。
5.暗褐色土　粘性やや弱く，しまりやや強い。粒子やや細かい。φ3～5mmのロームブロック微量。灰白色粘土を部分的に少量含む。色調黒い。
6.暗褐色土　5層より色調わずかに明るい。粘性やや弱く，しまりやや強い。粒子やや細かい。φ2～5mmの灰白色粘土ブロックを微量含む。
7.暗褐色土　粘性，しまりともにやや弱い。粒子やや細かい。灰白色粘土を微量含む。
8.暗褐色土　粘性，しまりともにやや強い。粒子細かい。灰白粘土のブロック。
9.暗褐色土　粘性やや弱く，しまりやや強い。粒子細かい。φ1～3mmのローム粒子をごく微量含む。
10.暗褐色土　粘性やや弱く，しまりやや強い。粒子やや細かい。暗褐色土と灰褐色土の混合土。暗褐色土と灰褐色土の混合土。φ3～5mmのロームブロックを微量含む。
11.暗褐色土　粘性，しまりともにやや弱い。粒子やや細かい。黒色土φ5～10mmのロームブロックを微量含む。

第 1869-4 図　M 90 －ＳＸ 49 平面・断面図

比較してやや色調が薄く，覆土の様相や遺構の規模から，中世の地下式坑，あるいは近世の地下室の可能性も考えられる。

遺物は土師器２点，須恵器９点が出土した。いずれも小片のため図化するに至らなかった。

Ｍ 90 －ＳＸ 51　規模は南北 1.95 m以上，東西 0.6 m以上，深さ 0.26 mである。Ｍ 90 － ＳＸ 50 に切られる。暗褐色土主体の覆土の様相から古代の遺構と考えられる。

遺物は出土しなかった。

Ｍ 90 －ＳＸ 52　規模は南北 0.95 m，東西 1.25 mである。遺構は工事による掘削を受けない深さまで及んでおり，一部地下保存としている。また，遺構の上部は大きく撹乱を受けており，調査での掘削は行っていない。平面での記録のみ行った。やや色調の薄い暗褐色土の覆土を持つ。Ｍ 90 － ＳＸ 50 と同様，中世の地下式坑，あるいは近世の地下室の可能性も考えられる。

Ｍ 90 －ＳＸ 53　Ｍ 90 － ＳＸ 54，ＳＸ 55，Ｐ 08-101 の上層にあった遺構である。遺構は撹乱によって壊されており，壁面Ｂ（第 1869-7 図）でのみ確認した。平面形や規模等の詳細は不明である。壁面で確認したところ，検出面からの深度は 0.23 mであった。暗褐色土主体の覆土の様相から古代の遺構と考えられる。

Ｍ 90 －ＳＸ 54　南北，東西ともに調査区外に延び，規模は不明である。深さは 0.12 mを測る。Ｍ 90 － ＳＸ 53，Ｍ 90 － ＳＸ 55 に切られる。暗褐色土を主体とする覆土の様相から古代の遺構と思われる。

遺物は出土しなかった。

Ｍ 90 －ＳＸ 55　西側は調査区外に及ぶ。規模は，南北 0.45 m，東西 0.25 m以上である。ＳＸ 53 に切られ，ＳＸ 54 を切る。遺構は工事による掘削を受けない深さまで及んでおり，一部地下保存としている。暗褐色土を主体とする覆土の様相から古代の遺構と思われる。遺物は出土しなかった。

Ｍ 90 －ＳＸ 56　北側，東側は調査区外に及ぶ。検出した規模は，南北 0.9 m，東西 0.6 m，深さ 0.17 mを測る。Ｍ 90 － ＳＸ 59 とピットを切る。暗褐色土を主体とする覆土の様相から古代の遺構と思われる。

遺物は出土しなかった。

Ｍ 90 －ＳＸ 57　北側はピットに切られ，Ｍ 90 － ＳＸ 52 とピットを切る。遺構の大半は調査区外に延びるため規模や平面形は不明である。検出面から底面までの深さは 0.18 mである。暗褐色土を主体とする覆土の様相から古代の遺構と思われる。

遺物は出土しなかった。

Ｍ 90 －ＳＸ 58　Ｍ 90 － ＳＸ 59 とＰ 08-104 に切られる。遺構の規模や平面形は不明である。暗褐色土を主体とする覆土の様相から古代の遺構と思われる。遺物は出土しなかった。

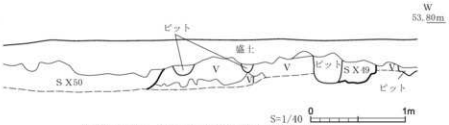
Ｍ 90 －ＳＸ 59　Ｍ 90 － ＳＸ 56 に切られ，Ｍ 90 － ＳＸ 58 を切る。規模は南北 0.6 m，東西 1.8 m以上，深さ 0.15 mを測る。暗褐色土を主体とする覆土の様相から古代の遺構と思われる。

遺物は出土しなかった。

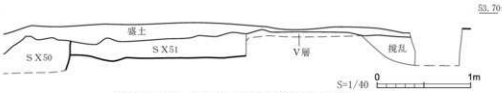
Ｍ 90 －ＳＸ 60　Ｍ 90 － ＳＸ 49 に切られ，Ｍ 90 － ＳＸ 61 を切る。遺構の大半が調査区外に延びるため，規模や平面形は不明である。遺構は工事による掘削を受けない深さまで及んでおり，一部地下保存としている。暗褐色土を主体とする覆土の様相から古代の遺構と思われる。

遺物は土師器１点，須恵器１点が出土した。いずれも小片のため，図化するには至らなかった。

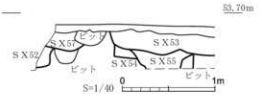
Ｍ 90 －ＳＸ 61　南北側は調査区外に及ぶため規模は不明である。遺構は工事による掘削を受けない深さまで及んでおり，一部地下保存としている。Ｍ 90 － ＳＸ 60 に切られる。遺構中央部



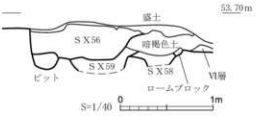
第 1869-5 図　切りあい関係説明図（A 断面）



第 1869-6 図　切りあい関係説明図（C 断面）



第 1869-7 図　切りあい関係説明図（B 断面）



第 1869-8 図　切りあい関係説明図（D 断面）

を大きく現表土に撹乱されている。暗褐色土を主体とする覆土の様相から古代の遺構と思われる。

遺物は土師器 1 点，土師質土器 1 点，金属製品 1 点が出土した。いずれも小片なため，図化するに至らなかった。

ピット

ピットは 8 基検出された。いずれも規模は長径 0.2 m～ 0.4 m，短径 0.15 m～ 0.25 m，深さ 0.1 m～ 0.7 m程度である。 8 基とも、暗褐色土を主体とする覆土の様相から古代の所産と思われる。

P 08 － 101 で縄文土器片 1 点，土師器片 1 点，P 08 － 104 で縄文土器片 1 点，須恵器片 1 点，かわらけ片 1 点が出土している。いずれも小片で，図化するに至らなかった。

表土からの出土遺物

表土から須恵器 6 点，土師質土器 1 点，陶器 3 点，瓦 2 点が出土した。その内，陶器・皿（01）と，須恵器・坏（02）を図示した（第 1869-9 図）。

3　まとめ

当調査区は，調査範囲や掘削深度に大きな制約を受けているが，多数の遺構を確認した。中でもM 90 － S X 49 が特筆される。

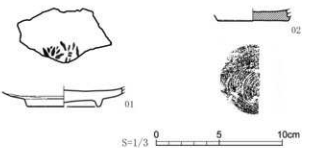
M 90- S X 49 とともに掘立柱建物跡を構成するような柱穴は，確認することはできなかった。ただし，当調査区は遺構の密度が高いため，新しい遺構に壊されている可能性を完全に否定することはできない。一方，当調査区の南に隣接する 1829 次調査では，幢竿支柱跡とみられる遺構を複数基発見している。M 90- S X 49 が単体の柱穴であると考えれば，同様の性格を持つ遺構の可能性もある。しかし，それらの幢竿支柱跡は平面形が隅丸長方形であるのに対し，当遺構の平面形は隅丸正方形であり，平面形状からは同一性を見出しにくい。

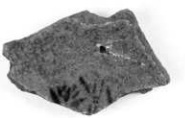
現時点では，掘立柱建物を構成する柱穴が他に確認できないことや南側隣接地の調査結果から，

単体の柱穴である可能性が高いと考えておきたいが，断定には至らない。

武蔵国衙域の南東にあって，当調査地区周辺がどのような土地利用がされていたのか，全体像を明らかにしつつ，個々の遺構の性格についても引き続き検討していく必要がある。

遺構No.	グリッド	平面形・規模（cm）	備　考
SX 49	M 90(12・13，44・45)	隅丸方形，長軸 90 ×短軸 84 ×深さ 42 柱痕跡，直径 30	柱痕あり。ピットに切られ，SX 60 を切る。
SX 50	M 90(13，45)	不明，南北 135 以上×東西 160 以上×深さ 30 以上	北西・東・南側は調査地区外。SX 51 を切る。未完掘。
SX 51	M 90(13・14，45・46)	不明，南北 195 以上×短軸 60 以上×深さ 26	西・南側は調査地区外。SX 50 に切られる。完掘。
SX 52	M 90(12・13，45)	不明，長軸 125 ×短軸 95 ×深さ 23 以上	北西・北東側は調査地区外。SX 57 に切られる。未掘。
SX 53	M 90(13，45)	不明，長軸不明×短軸不明×深さ 23	壁断面でのみ確認。SX 54・55 を切る。
SX 54	M 90(40，16 ～ 18)	不明，長軸不明×短軸不明×深さ 12	西・東側は調査地区外。SX 53・55・ピットに切られる。完掘。
SX 55	M 90(13，45)	不明，南北 45 ×東西 25 以上×深さ 21 以上	西側は調査地区外。SX 54 を切り，SX 53 に切られる。未完掘。
SX 56	M 90(12，45)	不明，南北 90 以上×東西 60 以上×深さ 17	北・東側は調査地区外。SX 59・ピットを切る。
SX 57	M 90(13，45)	不明，南北不明×東西不明×深さ 18	西・東側は調査地区外。ピットに切られ，SX 52・ピットを切る。
SX 58	M 90(12，45)	不明，南北不明×東西不明×深さ 9 以上	西・東側は調査地区外。SX 59・ピットに切られる。
SX 59	M 90(12，45)	不明，南北 60 ×東西 18 以上×深さ 15	東側は調査地区外。SX 56 に切られ，SX 58 を切る。
SX 60	M 90(12，45)	不明，南北 35 以上×東西 45 以上×深さ 14 以上	北・西側は調査地区外。SX 49 に切られ，SX 61 を切る。
SX 61	M 90(12，44・45)	不明，南北 60 以上×東西 40 以上×深さ 12 以上	西側は調査地区外。SX 60・ピットに切られる。





M 90 － 表土 (01)

No.	遺構	器種	口径・器高・底径	特徴
1	M 90 － 表土	陶器・皿	－・(1.7)・5.6	灰白色。灰釉・鉄釉（摺絵）。底部 1/4 強残存。ロクロ・削り高台成形。型紙摺。近世。瀬戸・美濃産。
2	M 90 － 表土	須恵器・坏	－・(1.0)・5.7	灰色。底部 1/2 強残存。ロクロ回転順回り。

M 90 － 表土 (02)

第 1869-9 図　出土遺物

第 1869-10 図
調査対象地全景（東）

第 1869-11 図
M 90 －ＳＸ 51 完掘状況（南）

第 1869-12 図
M 90 －ＳＸ 52 検出状況（東）

第 1869-13 図　東西トレンチ
遺構検出状況（西）

第 1869-14 図　M 90 －ＳＸ 49
検出状況（東）

第 1869-15 図　M 90 －ＳＸ 49
柱痕跡完掘状況（北）